

特集

「はじめまして」で 触れ合おう

＊4月の簡単あそび＊

研究セミナー

4月の 困った こう対応しよう

特別巻末付録

0・1・2・3・4・5歳児別

- 平成11年度カリキュラム基本方針
- 年間指導計画・基礎資料

月刊

指導 計画

VOL.16
1999

4

0・1・2・3・4・5歳児 年齢別
保育の展開と
資料

明
照
る
い



隊長のひとりごと

えりちゃんとひーくん

隊長（私立保育園副園長）

その1

私立保育園で副園長をしております隊長と申します。なぜ隊長と呼ばれているのかというと、7、8年前のお誕生会の出しものを事務所組でやったとき、お化けイモを見つける隊長の役をやったのが始まりです。それ以来、なぜか子どもたちのあいだに受け継がれ、今ではなぜ隊長なのかを知っている子はいません。

* 4月は、ぼくたち事務所組にとっても、たいへん忙しい時期です。園長先生をはじめ事務所の先生は、総出で新しい友達がいっているクラスの応援に行きます。出勤してくると、すぐに各クラスに散らばっていき事務所の先生たちは実に楽しそうです。主任先生も毎年、3歳児のクラスに行くのが待ち遠しいようです。

何年前のことです。主任先生が、「きよう、えりちゃんに『おばちゃん嫌い！』って言われちゃった」とうれしそうに話してくれました。机の上で遊んでいたのでも「あぶないよ」と注意したら言われたそうです。

そういうえば、入園説明会のとき、「そろそろおもちやを片づけようか」と言った園長先生に、「おばちゃん、あっち行って！」とおもちやをぶつけたのも、このえりちゃんでした。

ひーくんは、まず、登園するときにひと暴れます。

「先生、おはようございます」と言っている友達の横で、かばんを投げ捨て、逃げ回っています。お母さんは今にも泣きだしそうです。先生は、「お母さん、心配しないで。ちゃんとわかかってやっているんですから」といつも慰めています。そうなんです。ひーくんはわかかってやっているのです。

ひーくんが2歳のころ、お母さんは何回も家を出ていってしまいました。そのあいだ、ずっとおばあちゃんのところへ預けられていました。おばあちゃんとの登園のとき、特にひどく暴れるのも、甘えているからなんです。

「わしは孫を3人見たが、この子だけはわからん」と嘆くおばあちゃんですが、これがこの子なりのおばあちゃんやお母さんへの愛情表現のようです。

ある日、お母さんと手をつないで登園したひーくんは、ついに小さな声で「おはよう」と言ったのです。いつもしかり役の先生も、体中で喜びを表現しています。ひーくんは、部屋に行くまでに何人の先生にほめられたかわかりません。

そして、お昼になってひーくんは熱をだしました。体調が悪かったようでも、次の日から、また元気に逃げ回っていました。

今では、ひーくんはクラスの人気者です。もともと行動力があり、何もかもわかかってやっていただけですから、「そんなことをしなくても、先生もお母さんもみんなも、ちゃんと自分を見ていてくれる、認めていてくれる」ということがわかったようです。

「ばーちゃんを大切にしろよ」とぼくが言うと、「わかっぺらい」と笑いながら友達の輪にはいつていきました。

「おばちゃん、嫌い！」と言っていたえりちゃんは、今年、小学校1年生になりました。お別れ会するとき、主任先生が「学校へ行っても園にあそびに来てね」と言ったとたん、大きな目から涙をポタポタ流していました。

こんな瞬間があるから、ギャーギャー泣き叫ぶ年少さんのお部屋に喜んで行くのですね。



イラスト／山戸亮子

隊長のひとりごと

乳児組のうわさ

隊長（私立保育園副園長）

その2

先生たちのなかには、自分の子どもとのかかわりかたがほんとうに子どものためになっているのか、不安になるときもあるのではないだろうか。

でも、それは健全な証拠だと思えます。悩んで悔やんで、そして子ども笑顔に勇気づけられながら、「なんとかこの子たちのためになりたい」と日々、保育をしているのではないのでしょうか。

以前、当園でこんなことがありました。乳児組（2歳児）で気になるクラスがありました。そのクラスの担任は、初めてクラスのチーフになった先生でした（乳児クラスなので何人かで受け持ちます。そのときは3人でした）。

4月当初は、まだ園自体に慣れない子どもが多く、泣いてしまうのも無理ありませんが、そのクラスには5月になっても泣いている子が何人かいました。たまにそのクラスの前を通ると、子どもたちは例年に比べておとなしいようですし、ほかのふたりの先生たちも表情が硬いように感じられました。1年目と臨時の先生なので、慣れないせいなのかと思っていました。

あるとき、そのクラスに用事があった行きました。ちょうどチーフの先生が休みだったので、そこでぼくが見たものは、いつもよりのびのび動いている先生たちと、ほのぼのとした表情の子ども

たちでした。

そのころ、お母さんたちのあいだで、こんなことがうわさになっているのを聞きました。

「〇〇組のチーフの先生が怖くて、子どもが園に行きたがらない。ひどいしかりかたをしているようだ」

何人かの仲のよいお母さんに聞いてみましたが、確かにそういう話はでているということでした。つねづねチーフの先生が、「私がしかり役にならねば……」と言っていたことが頭に浮かびました。初めてのチーフという役に気負いすぎたのか、とにかく私は、一度話をしようと決心しました。

5時過ぎになって、その先生がひとりになったところに部屋を訪ねました。そこには、なっちゃんをひざに乗せて耳元で一生涯懸命にお話を読んでいる先生の姿がありました。なっちゃんは難聴で、まだはっきり言葉が言えません。お母さんも仕事で忙しく、お迎えも遅れがちです。夕日が射し込む部屋の中で、お話の声だけが響いていました。その姿を見たときに、ぼくは何も言うことができませんでした。

ザリガニ、ミミズ、メダカなど、いろいろな生きものはあったかごがありました。子どもたちと散歩に行ったときに、みんなが興味をもった生きものを、チー

フの先生が捕まえてくれて育てていたのです。かごには先生の子どもの名前が書いてあります。園の子どもたちのために、おうちからわざわざ持ってきてくれたのでしょうか。

ぼくは、お話を読む声を聞きながら、部屋の前を通り過ぎてしまいました。

その後、だんだんとクラスの雰囲気はよくなってきましたが、今でも、子どもやお母さんたちがどのように感じていたのか、ちゃんと話しておいたほうがよかったのかと考えることがあります。



隊長のひとりごと

まーくんの脱走

隊長 (私立保育園副園長)

その3

ぼくたち保育者は、毎日子どもたちと接していると、「この子はこういう子だから」とか「いつものことだから」と、知らず知らずのうちにその子のことをわかったつもりになってしまいます。

ある日の10時ごろ、事務所に主任先生が駆け込んできました。5分くらい前に子どもがひとりいなくなつたので、先生たちが探しているということでした。とつさにひとりの子の顔が浮かびました。3歳児のまーくんです。3人兄弟の末っ子で、2歳のころ、兄ちゃんたちに砂場に埋められても、砂だらけになりながら喜んでいたやつです。こいつは大物になるなと思つたものです。もちろん、今も先生たちを毎日困らせています。

「だれ？」
「まーくん」

ぼくは、自分の子どもを見る目の正しさを確信しました。

外を見ると、担任の先生のひとりが自転車を探しに行くのが見えました。いくらあのまーくんであっても、3歳児が5、6分で歩いて行ける距離は知れています。きつとすぐに見つかると思っています。したが、10分たつても15分たつてもなんの連絡もありません。まーくんの家までは、子どもの足で20分くらいです。途中には大きな道路を横切らなければいけません。

「おれも行ってくるわ」

不安がよぎりました。あのまーくんです。車が近づいてきても喜んでいるかもしれませぬ。

だんだんみんなが焦りはじめたころ、まーくんのお母さんが車に乗せて連れてきたという連絡がありました。園に帰ると、担任の先生がまーくんをぎゅつと黙って抱きしめていました。その後のことが気にかかり、給食をちよつとのぞきに行きました。みんなで楽しそうに食べているなかで、ふたりの先生の背中が小さく見えました。

「だめ、食欲がわかない」
「私、まだドキドキしてる」

そんなふたりの近くで、まーくんは元気に食べています。

「おれがな、道を歩いとつたら、どでかいダンブがビューと行つたんだぞ！」
「へー、スゲー！」

周りの子が感心しています。

「信号とこだつて、ビューと行つたんだぞ」
「スゲー」

そのたびにふたりの先生は「ハー」とため息をついていました。そんなまーくんの姿を見て、「さすがはまーくん。こいつならもう一回くらいやりそうだな」と思いました。

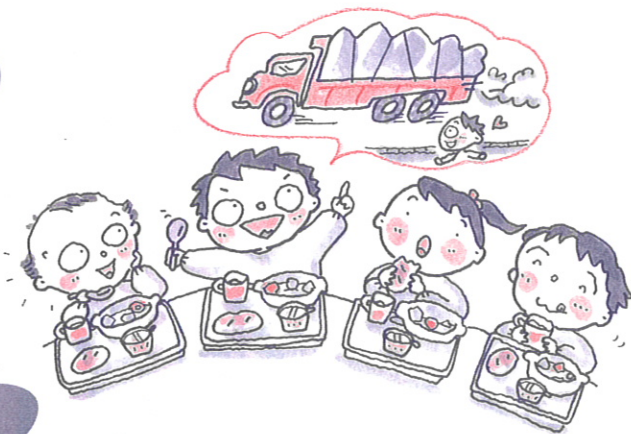
1週間ぐらいたつて、偶然、まーくんのお母さんと会いました。そして、この給食のようすを話すと、お母さんはペロ

ツと舌を出して、

「実は、あの日の朝、主人と大げんかをして、『もう、うちを出てやる』って言ったんですよ。きつとあの子、それを心配して私に会いに来たんだと思います。そんなこと気にする子じゃないと思つていたんですけど……」
と言いました。

「そーだったのか、まーくん！」
わかつたつもりになって、ぼくもまーくんを思い込みで見えていたんだな、とめづらしく反省をしてみました。

その後、卒園まで、まーくんは2度と脱走をしませんでした。



イラスト/山戸亮子

隊長のひとりごと

心ってどうやって育つの？

隊長（私立保育園副園長）

その4

保育者は、幼児期における直接体験の大切さや五感を鍛えることの重要性を、いやというほどわかっています。「子どもはおひさまと風と水と土があればいい」という先生さえいます。「小動物飼育」情操教育」というのもよく聞くことです。これらは一見もつともなこと、きつとみなさんも納得のいくことではないでしょうか。

では、ほんとうに自然のなかで育ち、五感を鍛え、小動物を飼えば、子どもたちは人や動物、そして自然に優しい心豊かな人間に育つのでしょうか。実は育たないのです。これは、断言してもいいくらいです。どうしてか？ それは、ぼくが小動物飼いまくりの見本のような男だからです。

ぼくたちは、毎日、朝から夕方まで野山を駆け回り、川で遊び、イヌ、ネコからザリガニ、カメ、ハトまで飼っていました。しかし、イヌ、ネコなどはかわいがっていました。カエルやクモ、セミは殺しまくっていました。クワガタはとるのが難しかったので大事にしていますが、カブトムシはどこにでもいたのでいつもノギリクワガタに頭を挟ませて殺していました。でも、こういうことで、子どものなかでは矛盾したことではないですよ。

自然のなかで育つと自然を大切にすることができるようになるというのもうそです。ぼくの

周りのおとなは、それこそ自然のなかで育つたような人ばかりでしたが、ごみやたばこの投げ捨ては日常茶飯事でした。それを見ていたぼくたちも似たようなことをしていました。

確かに、自然と親しむことや、五感を鍛えることは大切です。しかし、自然に触れ合えば自然を大切にし、生きものに触れ合えば生きものへの愛情が育つわけではありません。

では、「心」ってどのようにして育つのでしょうか。

ぼくは、もうクモもカエルもセミもカブトムシも殺しません。あたりまえの話ですが、「心」を育てるものは「心」しかありません。「先生がザリガニを大切に育てている心に触れる」「テレビでクモが一生懸命に生きてる姿を見て、そ



の姿に感動している友達（家族）に共感する」「じいちゃんが生きものを大切にしている姿を見て、自然への敬意を払う」「ヘビを殺そうとしているときに、止めにはいった兄ちゃんの怒りを思う（これ、ぼくです）」——人は育つ過程でいろいろな人のいろいろな「心」に出会います。そして、「心」と「心」が出会ったときに初めて人の心は育ちます。せっかくザリガニを飼っていても、先生が「与えておけばいいでしょ」と思っていたら、その「心」を子どもたちは見逃しません。小動物飼育は、一つのきっかけにすぎません。自然は、体と心の成長に必要なものですが、それが直接、「心」の成長に結びつくわけではありません。「心」を育てるには「心」しかないのです。

隊長のひとりごと

ウサギにまつわる話

隊長 (私立保育園副園長)

その5

ある日、ウサギの世話をしていると、6年生になったわたるが声をかけてきました。

「何、それ」

「ウサギのえさじゃん」

そして、わたるたちが年長のときの話になりました。

「あのときはむちゃくちゃおもしろかったな」

ぼくは、すぐにあの事件を思い出しました。

「先生、たいへん！ ウサギが逃げています」——なんと、園庭には7羽のウサギが走り回っているではありませんか。1、2羽は逃げたことがありますが、7羽全部は初めてです。ウサギたちは縦横無尽に園児たちの足もとを逃げ回っています。

騒ぎを聞きつけて、年長さんがやってきました。先頭の子たちは、ウサギを「友」としているやつらです。子どもたちをはじめ、先生たちにも安心の表情が浮かびました。年長さんなら、なんとかしてくれる——保育園ではいちばんしっかりしていて、頼りになるお兄さんお姉さんです。本人たちも、「保育園の平和はぼくたち、私たちが守る」と本気で思っています。

しかし、逃げ回るウサギたちは、いつものかわいいやつらではありません。も

のすごい勢いで逃げるウサギを、すごい形相の年長さんと、これまたすごい顔をした先生が追いかけて回します。

「そこを止めてって言うてるでしょ」

「なにやってんの！」と先生。「もうちょっとだったのに、おまえがジャマするからだ！」とけんかを始める子もいます。

もう、いつもの先生でもなければお友達でもありません。ほとんど、獲物を追いつめる動物のようになっていきます。何分たったのでしょうか。やっと全部のウサギがさくにはいりました。ハアハアと息を切らしながら、なんだかたいへんなことを成し遂げたような満足感が、みんなのなかに満ち足りていました。

「おもしろかったな」

ひとりの子がつぶやきました。

「おもしろかった」

みんながうなずきました。

しかし、ぼくには、一つ気がかりなことがありました。どうしてウサギが逃げたのかということ。これだけのウサギがいっぺんに逃げたことを考えれば、年長さんがウサギの世話をした後に鍵を

「だれがかけ忘れたんだらう？」

きつとこんな大騒ぎになってしかられるだろうな——

ぼくは、こんな満足感をみんなに与えてくれて「ありがとう」とお礼を言いたいくらいでした。

年長さんはお部屋に戻っていきましたが、そとのぞいてみると、お部屋の中では、興奮冷めやらぬ子どもたちががら話をしています。そして、何事もなく給食になってしまいました。

さて、先生はあまりの興奮に注意をするのを忘れてしまったのでしょうか？

ぼくは、あえてしからなかったのだと思います。きつと先生は、ウサギ当番の子がだれなのかも知っていたでしょうし、その子の表情も見たはず。こんな大騒ぎになって、その子がいちばんびっくりしていたはずですし、反省もしたと思います。だから、その表情を読み取って、しからなかったのでしょうか。

子どもたちと毎日生活していると、失敗や騒動は日常茶飯事です。それをどのように処理し、解決するかは先生にかかっています。この先生はきつと、そのときの子どもたちと同じ気持ち（満足感）だったのだと思います。そして、そのときの気持ちは子どもたちの心に刻まれました。だから、6年たっても、きのうのこのように楽しく話してくれるのでしよう。



イラスト/高間ひろみ

隊長のひとりごと

競争って必要なの？

隊長（私立保育園副園長）

その6

子どもの成長にとって競争って必要なのでしょうか？

「運動会がいつもビリで恥ずかしかった」「テストの順位が悪くていつも怒られた」など、みなさんも競争のなかでの悪い思い出がいろいろあるのではないのでしょうか？

また、「先生はできる子ばかりかわいがる」なんて感じた人もいるでしょう。このごろでは、小学校の運動会でも、できるだけ順位をつけないほうがいいと考えているところもありますよね。では、かけっこなども順位をつけるのがいいのでしょうか？

足が速い子もいれば、遅い子もいます。しかし、先生が勝ち負けを問題にするのではなく、その子なりにがんばっている姿を応援してあげる——その姿を子どもたちが見ていれば、先生が何も言わなくても、遅いからだめというわけではないのだと気づきます。そして、先生やお友達のようなよつすを見れば、親も「うちの子は遅いから恥ずかしい」とは感じないのではないのでしょうか。

先生によって、クラスの雰囲気も変わりますよね。

先生の言うことを聞く子がいい子で、聞かない子は悪い子と先生が思っていれば、そのようなクラスになります。絵がうまい子がえらくて、へたな子はだめだと思っていれば、子どもたちもそう思い

ます。運動会なども順位をつけることが悪いのではなく、足が速い子がよい子で、遅い子がだめな子と、先生や親が考えることが問題なのです。そのような勝ち負けの価値観しかない、おとなが問題なのです。

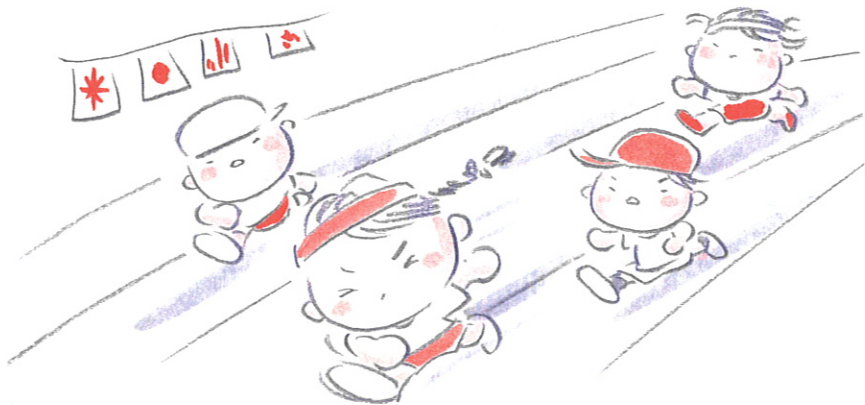
どんなことにも、得意な子と不得意な子があります。先生が、うまい子ばかりをほめたり気にかけてりすれば、子どもたちは敏感に感じ取ります。「うまい子はえらくて、へたな子はだめなんだ」と。

子どもたちは、たいへん敏感で、先生をはじめ、周りのおとなたちが感じていること、自分に求めていることを、口にださなくても感じ取ります。そしてその価値観のなかで成長していきます。

集団生活をしていくうえで、競争とは無縁ではられません。そして競争のなかには、必ず勝者と敗者がいるわけではありません。がんばった子、みんなをまとめた子、実力がだせなかつた子などなど、いろんな子がいるはずですよ。周りのおとなが、いろいろな切り口で価値観を与えてあげればよいことです。

幼児期だけでなく、学校や社会でも、それぞれの子どもに対していろいろな価値観で接することで、その子らしさのびのびと育ってほしいと願っています。

子どもたちにとって、いちばん害のあることは劣等感をもたせてしまうことだと思います。幼児期に受けた劣等感はその



の子の一生に大きな影響を与えてしまいます。競争は、優劣をつけるためにあるのではなく、お互いの違いやよさを認め合えるよい機会とするためにあるのだと思っています。

隊長のひとりごと

「待つ」ということ

隊長（私立保育園副園長）

その7

みなさんは、「子どもが待つ」ということをどのようにお考えでしょうか。園などで集団生活をする時、どうしてもいろいろな場面で待つことになりがちです。お便所で待つこともありますが、給食だつてみんなの分が配り終わるまで待ちます。そのなかで、保育者は待つべきときと、待たせなくてもよいときをいつも考えていなければなりません。

ふと、ある園の公開保育（年中児）を思い出しました。そのときは、イモ掘りのようすを作る製作でした。

まず、子どもたちは、自分でお道具箱を取りにいけます。みんなが席に着いたら、先生が紙を一枚ずつ配ります。その後、イモを折る折り紙を3枚ずつ配ります。ひとりの先生が27人の子どもに配るわけですから、これだけでも、けっこう時間がかかります。そのあいだ、子どもたちはじつと黙って、手をひざの上に乗せて待っています。

ここでやつとお道具箱をあけて、はさみやのりなどを取り出しました。いよいよ作るのかと思ったら、こんどは使いかたの注意です。そして、イモ掘りのようすはどうだったのかという話の後、やつと製作が始まりました。

こうなってくると、作る楽しみよりも待つ訓練のようになってしまいました。そしてできあがった製作は、折り紙で折った3個のイモの上に、自分が座つ

ているという、似た構図ばかりになってしまいました。

同じように、イモ掘りの思い出を作るという課題保育でも、ある園では先生が最初に少し説明をして、後は子どもたちが自由に、はさみやのり、セロハンテープを使い、材料は廃材コーナー（子どもたちが園や家でいらなくなった紙切れや箱カップなどをためておく場所）から、いろいろなものを探し出してきて、あれこれくふうしながら作っていました。

できあがった作品は、イモ一つとつても、紙を丸めて作ったものから、おやつのカップ、トイレトペーパーのしんを使ったものなどいろいろあつて、とても楽しめました。なかには、あまりうまく作れない子を助けてあげながら、3人ぐらいで共同作品を作った子もいて、みんな自分の作品を誇らしげに説明してくれました。

「みんなで作ったイモ掘り。みんなで作った作品」——楽しそうな作品や笑顔が、そこにはありました。同じ課題保育ですが、先生が違うと、こうも違うものですね。

集団生活と「待つ」ということは切り離せません。どのようなときに待たせるべきなのか、どのようなときには待たせないようにすべきかを、考えていかなければなりません。とかく、おとなは自分のつごうで子どもたちを待たせることが



イラスト/高間ひろみ

隊長のひとりごと

大切な信号

隊長（私立保育園副園長）

その8

子どもを「外に現れている部分（見える行動、聞こえる言葉）だけでわかる」と思ってしまうと、大切な信号を見落としてしまいます。

子どもは、いろんなときにいろんな方法で信号をだします。保育者も外に現れる形だけで安心していると、なかなか心のなかにはいつていけません。

あきちゃんは、とてもおっとりとしていて、落ち着いた子でした。でも、年長さんになったころから、なぜかお友達ともうまく遊べなくなっていました。泣くことが多くなりました。保育者も最初は、環境が変わったせいかと考えていました。が、どうもそれだけではないようです。お母さんにも相談しましたが、はつきりとした理由がわかりません。

ある日、「言葉あそび」をやりました。すると、あきちゃんの「り」の所には「りこん」と書いてあります。驚いた先生はそつとあきちゃんを呼んで、「あきちゃん、りこん」ってどんなことか知ってる？」と聞きました。するとあきちゃんは、声押し殺し、あまりに子どもらしくない泣きかたで、急に泣きだしました。あきちゃんがこんなにも苦しんでいたのかと、担任の保育者は思わず抱きしめてしまったそうです。

年長児のりょうくんは、朝はいつも元気なのですが、帰りのバスで家が近づく

と、きまって寝たふりをします。つきさつきまで、みんなと大声で歌っていたのに、自分の家が見えたとたんに寝るので、保育者に起こされても、なかなか起きません。

「役者やなー」
「ぼくがバックミラーを見ながら感心している、ふらふらしながらお母さんに寄りかかっています。お母さんは体調でも悪いのかと心配して、だっこをして家まで連れていきます。そしてこれを毎日やります。

そのうち、お母さんは怒りだしました。が、絶対にやめようとしません。でも、お母さんに抱かれていくときの幸せそうな顔を見れば、りょうくんの気持ちがよくわかりました。三男のりょうくんにとって、この道路を渡って家の玄関までが、唯一、お母さんを独占できる時間なのです。そしてりょうくんは、家に着くと遊び始めるそうです。

あきちゃんのお父さんは、年長の夏に家を出ていってしまいました。でもあきちゃんは、そのころからだんだんと落ち着いてきました。家の中に、いざこざがあることがいけなかつたようです。

今では、中学3年生になってお母さんより背も高くなっています。しかし「このころは、私の言うことなんかち

つとも聞いてくれない」と嘆くお母さんですが、その反面、「お母さんといっよの保母さんになりたいと言ってくる」とうれしそうに話してくれます。

りょうくんの寝たふりは、小学校にがったら、まったくなくなっていました。今では、学校から帰るなり、すぐに右の家にあそびにいつてしまうそうです。「あのときは、恥ずかしくてたまらなかつたけど、私に甘えてくれた最後だった」とお母さんは話してくれま



隊長のひとりごと

「しかること」と「ほめること」

隊長（私立保育園副園長）

その9

先生はどうしても子どもたちをしっかりとほめたいときがありますよね。では、どのようなときにほめなければいけないのでしょうか？

まず、自分や相手の安全にかかわることをしたとき、人に迷惑をかけたとき、人の心を傷つけるようなことをしたときでしょう。このようなことをしてしまつたときには、たとえ子ども自身が軽い気持ちでやっていても、ちゃんとしかるべきです。ただ、この場合でも「どの程度のことをしたら、しかるべきなのか？」というのは、先生本人の資質にかかわってきます。けがを恐れるあまりにいつも先生が目をつけていては、子どもたちものびのび遊ぶことはできません。

このような場合以外にも、自分（先生自身）の思いどおりに動いてくれないときにしかることもあるでしょう。

しかし、子どもがどうしてそのような行動をとるのかをよく考えたうえでしかない、子ども自身がどうしてしかられたのかわからない場合が多くあります（中学生に幼稚園時代のことを聞いてみたら、「しかられた理由がわからない」と言っていました）。

先生によっても、しかりかたは違います。子どもを自分の思うように動かしたいのであれば簡単です。怖い先生になればいいわけです。ただこの場合、先生の言うことをよく聞く子にはなりませんが、

行為自体の善い悪いで判断できるようにするのはなく、先生にしかられるか、しかられないかで判断するようになりま。これはお母さんたちにも当てはまることです。

さらに、「しかる基準」がはっきりしなくて、気分でしかっている場合も、子どもは保育者（またはお母さん）の顔色で判断するようになります。どんなしかりかたであれ、子ども自身が「どうしてしかられたのか」「どういうことが悪いことなのか」をしつかり納得できるようにすることが大事です。

そして、「しかること」とともに大切なことがあります。それは「ほめること」です。しかられた子が、同じような場面で進歩を見せたら、しつかりほめてあげることです。確かな保育をしている先生は、決してしかりっぱなしにしません。このしかられた後のフォローが意外と大切ですよ。

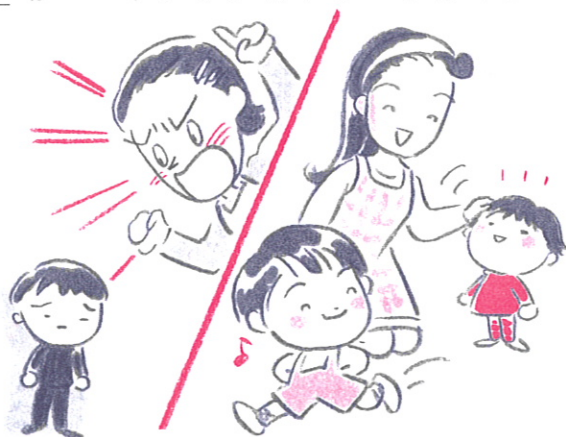
おとなであれ子どもであれ、しかられるよりはほめられるほうがいいに決まっています。自信をつけてもらうためには、しかるだけではだめです。

また、よくしかられる子は、家でも園でもしかられているので慣れてしまっていて、少しぐらい先生にしかられたって「へ」とも思いません。「お母さんやお父さんのほうが何倍も怖いよ」と言ってい

る子もいます。このような子は、しかられるよりも、ほめてほめてほめ殺すくらいがいいでしょう。

当園にも悪さばかりしている子がい、先生たちも最初はしかっていましたが、効果がないのでこのころはほめまくっています。あまりに露骨なほめかたなので、「これでは本人がばかにされると勘違いしないか？」と心配になります。が、今まであまりほめられたことがないので、すっかりその気になってがんばっています。かわいいやつです。

「しかること」は、確かに大切です。でも、その何倍も「ほめること」は大切です。



隊長のひとりごと

保護者への対応

隊長（私立保育園副園長）

その10

日々の送り迎えのときなどに園への要望を聞く——このような保護者との対応はとても大切です。このときの対応のしかたで、その園の評判が決まってしまうこともあるくらいです。でも、子どもにとつてよかれと思ってやったことが、うまく伝わらなかつたり、誤解されてしまつたりすることもありますよね。そんなことから、「今の親はわがままだから、一つ要望を聞くと、次から次へと要求をしてきて園の運営が成り立たなくなる」と言つてはばからない園長先生もいます。それでは、いろいろ言つてくる親にこそ問題があるのでしょうか？

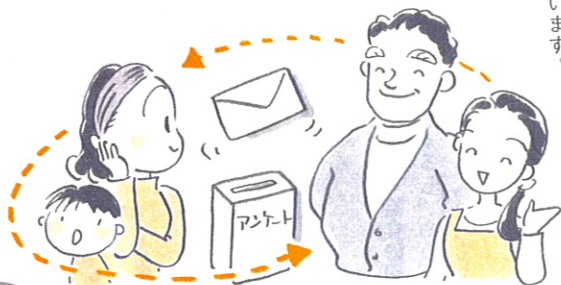
当園でも、保護者からご意見やご要望をいただくことがたびたびありますが、これはほんねで話し合えるチャンスだと考えて、園としてもできるだけ吸い上げようとしています。

例えば、年3回の「げんきっ子ビデオ」（保育中の子どもたちを撮影したもの）の無料貸し出しとダビングを行うときに必ずアンケート用紙をつけ、幸福のアンケート箱（アンケートを入れるとよいことが起こる）とぼくが言いふらしています）に入れてもらっています。なぜか石や女性用下着のカタログなどがはいっていることもあります。毎日その中のぞくのが日課になっています。そして、おやつに出すお菓子の種類から、園に置いてある絵本の種類、園への疑問など多

くのご意見をいただきます。なかには、B5のアンケート用紙の裏表だけでは足りず、レポート用紙をつけてくる方もいます。ぼくは、このアンケートに記名があれば、すべて回答します。園としては、こういう考えでやっている。ただ今、先生と話し合い中。“次回の職員会議の議題に入れる予定”など、一つ一つレポート用紙に回答を書いて封筒に入れて渡します。分量もいただいたものの何倍かになります。これを名古屋の嫁入りにちなんで「アンケートの3倍返し」と呼んでいます。たいへんな労力だとも思いますが、これをおこなうと、後で多くの保護者が驚くほど協力的になってくれます。後々のトラブルの芽を発生できると思えば、たいした労力ではありません。最初のボタンの掛け違いが、どれほど“事”を大きくしてしまうかは、先生たちならイヤと言うほどわかってい

るか“ということが伝わるかどうかです。保護者は、自分の思いどおりにしたくと言っているわけではないように思いますが、初めての子育てや集団生活への不安、悩みがいろいろな形になって園への要望になることもあります。園として、そういった意見を吸い上げる機会をつくらずにいると、結局、園の見えないところで言われているだけになります。それでも、知らないほうが無難と考えるのか、子育てを保護者と園、みんなで本気になって考えていこうとするのか、園自体が問われているように思えてしかたありません。園の常識や思いを押しつけるだけでなく、つねに子どもや保護者の気持ち、思いやる優しさが必要になってきていると思います。

保護者がいろいろと園に言ってくるということは、園や子育てについての関心が高い証拠です。実際、こういった機会に園のことを理解した方が、後に、父母の会の会長や役員になることも少なくありません。今思い返しても、保護者の要望どおりにしたことよりも、園の考えや思いを伝えたことのほうがはるかに多い気がします。大切なのは、意見や要望に対して、“園がどこまで真剣に考えてい



イラスト/高間ひろみ

隊長のひとりごと

人とかかわって育つ

隊長 (私立保育園副園長)

その11

園で集団生活が始まると、ひとりでは経験できないような楽しいことがたくさんある一方、さまざまなトラブルにも出会います。おもちゃの取り合い、お友達にたたかれた、かみつかれた……などいろいろなることを経験します。2歳児くらいだと、口でうまく言えない分、たたいりかみついたりすることもあります。また、乱暴な子もいますので、その子を保育者がよく見るようにして「人をたたくことやかみつくことはいけないことだよ」と納得させて、他人に思いやりや優しさがもてるように援助することが、この幼児期でもっとも大切なことです。頭ごなしにしかるだけや保護者が謝ればよいという問題ではありません。

子どもは、さまざまなトラブルに出会うことで、トラブルに対処する知恵や、トラブルに耐える力をつけながら成長していくのです(もちろん、保育者の適切な援助や指導が大切なことは言うまでもありませんが)。ですから、「被害者」「加害者」という考え自体がまちがっていて、どちらも互いの成長のために必要な仲間なのだと考えたほうがいいと思います。

保育園にはいると、最初の1年はよく病気をします。「園に行つてうつされた」「あの子にうつされた」と言ってくる保護者もいますが、これも同じことです。病気をすることによって体が丈夫に育つ

のです。むしろ、小さいときにやったほうが症状も軽くすむ場合が多いようです。

保護者が子どものことを把握できるのはいつまででしょうか。守つてあげられるのはいつまででしょうか。きつとひとり立ちしていかなくてはならない時が来るはずですから。その時までに経験しておくべきことが多くあるはずです。

「キレル」子どもたちの原因の一つとして、食生活や家庭環境、対人関係の問題と共に、小さいころからのストレス不足があげられています。人間はいろいろなストレスを経験していくことで、その対処のしかたを身につけていきます。これを経験せずに成長すれば、わずかなストレスで簡単に「キレル」ようになってしまいます。

友達とおもちゃの取り合いを経験して、初めて貸し借りを覚えます。けんかをして泣いたり泣かされたりしながら、お友達への優しさや思いやりが育ちます。お母さんや保育者が言葉だけで「お友達と仲よくね」と言っても、優しさや思いやりが育つわけではありません(これは、子どもたちの世界におとながはいるといふことではありません)。人間は、成長する過程でいる人々とかかわるものです。そのなかには、いじ

めつ子もいるでしょうし、陰湿な子もいるでしょう。いやな先生や上司に出会うかもしれません。そういう人たちのつきあひかたは、それこそ小さいころからいろいろな人たちとつきあって、人間関係から学んでいくしかありません。

親が守つてやらなければならぬ場合も多くあると思いますが、それにも限界があります。子ども自身が自分で立ち向かっていかねばならないことや、解決しなければならぬことのほうが多いはずですから。親は、自分のかわいい子どもがつかいめにあったり、苦しんだりしていれば、「なんとか助けてあげたい」「守つてあげたい」とお思いになるでしょう。この気持ちはいへん大切なものであり、しっかり子どもにも伝えます。しかしこの幼児期に、親から離れて子どもが経験する集団生活でのさまざまなできごとは、人間として育つうえで必要なことなのです。



隊長のひとりごと

園で育つもの

隊長（私立保育園副園長）

最終回

幼稚園や保育園って、子どもたちだけが育つ場所でしょうか？ 保育者なら即座に「それだけじゃない！」と思いますよね。保育者自身も人間的に成長しますし、子どもたちに教えられることも多いと感じているのではないのでしょうか。

実際、子どもたちと毎日かかわっていると、そのすごさに圧倒されます。きのできなかったことが、きょうは簡単にできてしまったり、どうしてこんなことをするのかと思っていると、思わぬ理由があったり、「どうして理解してくれないの？」とひとみで訴えてきたり……。忙しいで見落としそうになっている保育者に、子どもたちはいつも全身でぶつかってきます。

「こんなこともわからないの？」「こうすれば、先生どうするかな？」「どうしたら、ぼくのほうを見られるの？」などと試されているのを感じることもありますよね。そんななかで、悩み悔やんで迷いながらも、子どもたちの笑顔に助けられて、みんな保育をがんばっていることと思います。そして、そういった状況にいれば、保育者自身、成長しないはずがないですし、年より若く見えるのもあたりまえですよ。

「私は子どもたちに毎日元気をもらっている」と言っている保育者もいました。「保育園に勤めてよかった」と思うこ

との一つに、多くの親御さんたちと知り合うことができ、その成長が見られるということがあります。

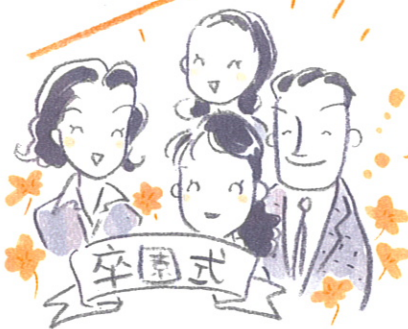
今年も、入園式には、きれいに着飾ったお母さんやお父さん、子どもたちがいっぱい来ました。

園の門の正面に車を停めて交通のじまになった人、子どもが出したおもちゃをそのままほったらかしにしてしまった人、自分の子どもしか目にはいっていないような人もいました。ここ何年かで、その割合は多くなってきましたが、ぼくは全然心配していません。実は、この前卒園した子どもたちの親御さんもそうでした。でも、最後のお遊戯会では、違う学年の子たちにも声援を送ってくれましたし、保育者が片づけ忘れた遊具をそつと

元の場所に置いてくれる人もいました。卒園式を見ると、いつも思うことがあります。それは、入園式の時より卒園式のほうが、お母さん方がきれいになっているということですよ。

化粧のしかたがうまくなったとか、ぼくが熟女好みとかではありません。単なる勘違いでもありません。これは3〜6年前のビデオを見ても明らかです。きれいになっているのです。きっと子どもどのこの何年かの経験が、お母さん方を人間的に成長させ、それが表面にまであふれだしているからだと思うのです。

こんなふうに、親御さんと子どもたちの成長を間近に見ていけること、それが保育者の最大の喜びです。



イラスト／高岡ひろみ